

KODAK
LICENSED PRODUCT

KODAK Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



和漢文操

辨類 類類
言類 頌類

五

文
1911
九

5
686
5



のまればももまねをけしつゝも朋友のれせしむか
 年もそちあましく幸への筆をけしつゝも
 七敷の節の。からぬの浦のまね人をもつゝも
 るあねねも一葉をけしつゝも
 けしつゝも一葉をけしつゝも
 てそを海をけしつゝも
 そのまねをけしつゝも
 桐のまねをけしつゝも
 とけしつゝも
 婦まねをけしつゝも

標馬しほろろたる表たる牛の遊からかへて
 草のまねをけしつゝも
 けしつゝも
 まねをけしつゝも

○註曰●怨歌行新製齊執事岐事如霜雪●王建詩輕
 羅扇流螢○秋扇ノ詩歌ノ數多アリ奉止及ハス
 ▲鞍馬山ト神各川ト行ト紳ト各所ナリ淨申毛神谷紙トアリ
 ▲夏川以下ノ四人ハ中古ニ侍世禰ノ各人ナリ ▲清少納言カ枕
 草席ニ扇骨ノ瑤キヲ奏言トスルテ扇のふあてしけ
 のしとてり ▲高僧傳ニ法顯ニ葦ノ天竺ニ渡リテ見
 白繪扇ヲ不覺渡下ニ或抄ニ中啓ノ詔アリ後勅スレ

大正...

しつうてかゝる宮中の歌也といふことゝ社の中
するふ事のと地と社をいふやうして不意のこゝろ
とて四事の時朝とそあくる断続の法もこれ
んがく起程の法もこれにまゝなる也

團クキハ 玩具並序

僧馬泉

むしより我のく麻と和割とすいあゆまて凡
和れんせまうんクキハ 團クキハ 扇とす和割といふものなり
まらかゝるいと能活の書はよく團クキハ のことなり
まゝなり海をさうて此はも歌も扇も其團
やうて爰も音訓のやうにいふことなりあう松蔭

團クキハ 扇も孔明の羽扇もさういふ團クキハ といふやうな
も二ふの名ありとまうて一にれは扇のありあつて
抑々余クキハ かく團クキハ をかゝるて鈍クキハ な扇とす
もさういふかへから此の名の酒などもさう

具クキハ 賢

礼クキハ 云樂クキハ 云
時鳥クキハ 又クキハ 暉
信クキハ 玄クキハ 叙クキハ 甲クキハ
母クキハ 乃クキハ 追クキハ 致クキハ
團クキハ 離クキハ 名クキハ 圃クキハ
拂クキハ 塵クキハ 隱クキハ ルクキハ
兒クキハ 玉クキハ 写クキハ 紋クキハ
無クキハ 常クキハ 崇クキハ 佛クキハ
郊クキハ 花クキハ 明クキハ 曙クキハ
招クキハ 凡クキハ 讀クキハ 文クキハ
胡クキハ 馬クキハ 益クキハ 鳳クキハ
有クキハ 意クキハ 然クキハ 君クキハ

○評云は既見と例の被擬として往するも安んぢたるを
 を一や而の稱するを合其の袖とめんらるる袖を此
 合とあそむるは佛師の云るも老若の二にわらわ
 況するおちるとこそを此語の微中より二をばはるは佛
 とせよとて亦女夫と虚空を非と佛の起結
 観音大士と馬車等々文中の字もさしてさう
 ありに遺教の知足といひて合福の二字と措く
 近くと一編の親疎といひ遠くともやのを詞ひ
 作者と長野氏とて越の新修といはれ柱とてに獅子
 の親牙といひ鑑きの西雲といひ二人の所子と稱す

蒼生賛

運二

五子

繫而不絶

運二

にあたりて非とて

○評云は既見と例の被擬として往するも安んぢたるを
 ありにけりくと論語五子の詞あり係法とて不令の
 とはいつて不絶のこまよち多しとてたつと二種の
 ともありけりとは表申して儂の大空の
 その地をみそ糸の糸とて

縁の地はもあはれ

之類圖贊

東華坊

世傳醋吸之圖者塩梅儒教老之道而
 酸其耳其苦共所謂人之好不好與不然
 厚有_リ世_ニ謂_フ物_ノ教_ノ奇_ノ事_ヲ而飽_ス不_レ有_レ耳_ヲ不_レ
 有_レ苦_ヲ不_レ寒_ヲ磨_レ月_ノ夜_ノ之_ノ末_ニ飯_ヲ則_レ為_レ鮓_ニ其_ノ飯_ヲ而
 嘗_レ少_シ所_レ酸_レ了_レ也_ヲ增_レ而_レ好_ク細_ク豆_ヲ人_ノ者_ノ嘗_レ其_ノ為_レ
 體_ニ臭_ク尔_レ哉_ヲ孰_レ厚_ク謂_フ道_ノ之_ノ是_ト矣_ト孰_レ厚_ク謂_フ道_ノ之_ノ
 非_ト矣_ト攻_レ乎_レ異_レ端_ヲ斯_レ害_ト也_ト已_レ抑_レ謂_フ太_極之_ノ道_ト者
 從_レ本_一一_レ躬_ノ之_ノ道_ト也_ト共_レ分_レ千_車万_馬之_ノ歧_ヲ而_レ或

者_ノ打_レ鳴_レ念_レ佛_ノ之_ノ鍾_ヲ宛_レ或_レ者_ノ橫_レ倒_レ參_レ禪_ノ之_ノ棒_ヲ
 竈_ニ此_レ取_レ本_ノ者_ノ詭_ク虛_ク兮_ト彼_レ斯_レ亦_レ者_ノ詭_ク實_ク兮_ト儒
 家_ニ結_レ五_レ常_ノ之_ノ垣_ヲ則_レ佛_ノ門_ニ張_レ五_レ戒_ノ之_ノ網_ヲ而_レ互
 斷_レ往_レ來_ノ之_ノ道_ヲ則_レ老_子者_ノ說_レ手_ヲ振_レ千_貫而_レ割_レ
 牛_ヲ兮_ト折_レ衡_ヲ兮_ト為_レ家_ト天_地而_レ鏡_モ麼_モ不_レ卸_レ特_レ擴
 我_レ好_レ之_ノ道_ヲ與_レ所_レ率_テ哉_ト謂_フ佛_ノ諸_ノ之_ノ道_ト者_ノ汲_レ合_レ
 之_ノ家_ノ之_ノ意味_ヲ而_レ塩_レ梅_ノ和_レ漢_ノ之_ノ風_ヲ雅_ラ了_レ則_レ人_ノ法_ヲ
 有_レ從_レ孔_子之_ノ詛_レ諛_ヲ居_レ心_ノ法_ヲ者_ノ傳_レ教_ノ子_ノ之_ノ虛_レ靈_ヲ
 些_レ又_レ法_ヲ者_ノ效_ヲ在_レ子_ノ之_ノ形容_ニ歷_レ然_レ則_レ非_レ儒_ト兮_ト
 非_レ佛_ト兮_ト不_レ構_レ老_子在_レ揚_墨之_ノ一_城兮_ト假_レ令_レ謂_フ

我如孔子之御經共知言語之用與無用
 了則其虛廢合點兮其實廢合點兮何条
 可美暗許之黑豆腐矣從言而嗜人柄廢
 欲望而遊者俳諧之謔笑也乍去乘人之
 味線而遊芳野山之花了。廉難波浦之
 以而頰菱兮頰菱兮頰于月于雪也則立
 合點人形之憂名而成果學文之日備也矣
 二子能察我言之虛實而學而思兮思而
 學兮知今日之用與無用則元賢悖豐干
 之饒舌而看破獅子庵之遺稿矣爾有則

所謂之人行則必有我師為合點文殊
 知慮之乘此圖者頰儒佛老之內證而可謂
 俳諧一字之雅物矣夫

○註曰醋吸三聖母多手圖ナリ近ク繪本抄ニ註解アリ
 △俳諧拾芥何ソモ有夜ニ某汁末湯ト云ルハ米飯ナリト
 多ハ米飯ト平話ニ讀レシ △異端ハ論語ノ全文ナリト
 スルハ語ハ政字ヲ治字ノ論アリ孔子ノ意ヲ察スルハ道ノ家々
 ノ建派アリテ佛老モ楊墨モ一理アルハ譬言ト我ノ家ノ建立ニ
 自ラ答言テ他ヲ毀ル正字ニ怒リテ費ハカラストフ石ハ先後抄
 ノ取意ナリ △五常五戒ハ儒ノ制法ナリ細本スルニ及
 ハス△老子割中折衝ハ天地家モ其趣取意ナリト按スル

ふみ決ちる命しやけいもちる命のきこひあて
 まりしもわれもほくられぬめしし論議の端
 ちよんそとあうとけをよきとせよとてあつて
 くらりしむけきもあつたけけのあめ
 ちよあしよふの色をさちりしはれれ
 ちよあしよとさきとてしあつたけけの甲
 とまひてきし部めとてあつたけけの甲
 ちよあしよとさきとてしあつたけけの甲
 風風とてしあつたけけの甲
 みとけりと失りしとてしあつたけけの甲

そとひ齋とぬじりしとてしあつたけけの甲

○註曰▲王代実記ニ延喜帝神泉苑ニ行幸アリテ藏人ヲ以テ
 池ノ路ヲアラス宣旨ナリト云テ立寄ルニ其路ノ手ニ留
 レリト御震業ニテ路ノ上ニ侍身類ノ頭又レシトテ
 五位ノ官札ヲ給ハリシトテ論語ニ繪事後素云々○枝本
 等語と云ふれ其のまじりもさきとてしあつたけけの甲
 ちよあしよとさきとてしあつたけけの甲
 可くさ作ちりしとてしあつたけけの甲
 田舎語ありしとてしあつたけけの甲
 ○誦云いよとてしあつたけけの甲
 簡古の辨とちりしとてしあつたけけの甲
 ちよあしよとさきとてしあつたけけの甲

松の心も山もたゞし一はまの成物ありん

○註曰△天地ノ方圓ハ前ニ出タリ△海樞録ニ相思子大如豆世即
 即君子也或云放醋中雌雄相逐便令便下云
 ▲唐史ニ
 国忠ハ肉屏風ノ奢者アリ孫晟ハ肉墨盤ノ奢者アリ細茶手スルニ文
 繁シ▲神仙傳ニ葛由周代ノ仙人ナリ老骨域ハ天皇ノ神人ナリトフ
 美丹トハ延齡丹ノ類ナリ▲浦嶋ヲ故古又ハ前ニ山タリ
 ○評云けふも大いれ城解ふく了張治く身由美丹の訊
 詞より浦嶋の心おの一字と「せり」君ハ八代と祝さん
 こゝと祈願の文はとつあかし作をたあまのまなみて
 廣崎の文殊院に住す柳眠きと雨舟の標はかりとせ

大根頌

沼潜柳

大根とふれゆめりの葉は
 鎖舟し大蕪苗とせよとこれい大小の辨とまゝし
 へもせれとまゝおてへ織草苗とすと我國の
 へとせらりおとるこれや翻訳の訛といふはれい
 けおとおらもくもお行田の里に我々とし鴨川の
 へもとまゝも中ねさめえとよひをりりり取挿
 青溪の河とわらうたてく女女とやとられおる
 あつへ遊るる方ありのを殿よはるは月
 のゆらりもたの大根のさうあおひを産張
 つけり物とんてりる産張さあてわらんて

坊のりてまねりし妙者のけりておもしろいけりておのれを
世のりたれどもおのれ仰座の寂れみお却のる惟
七歌書し作れり六十帖の記おのれ後とるべき言の佛
らうらと好らきうけりておのれより又うらうら

○註曰△神田録思素文字在_リ於_レ上_ニ所謂_ニ馬上_ニ厠上_ニ松
上也_ニ金吾壁賦_ニ馬上_ニ横_ニ朝_ニ賦_ニ詩_ニ云_レ ●陸放翁_ニ夜雨
詩_ニ支_ニ松_ニ迷_ニ癖_ニ聽_ニ始_ニ奇_ニ○新古今_ニ信長_ニあり_レ 孫北
あきけとあうわふおのれとて地うと ▲軍史_ニ信長_ニ云_レ
長雪隠ノ向ニ蘭丸ヲ太刀ヲ持テカラ割鞠ノ教ヲ美覚ヘ
スル類ナリ △無量壽經_ニ具足_ニ五劫_ニ思惟_ニ云_レ△源中_ニ六十帖
ノ趣向_ニ湖水_ニ觀相_ニ浮_ニ上_ニ郡_ニ船_ニ終_ニヲ_ニ作_レリトフ

○源中は辨の娘藤原のふけりてふまの地とてくとり
まふしあるに吾の証諸り仲孫の思惟とて
源中のおおし今もてるにうとて屋中くうまをりて
これに辨の人の優遊とてあるとて一毛傳と文鑑ありて
舊内中ぬのふ心ありと湖南の松中よれぬ遺跡あり

愛_{スル}管_ヲ辨

苗_草院

あまあけを母と甘名のおもあんこむむ時を書き
かきつるやいおたむしおうつる帝の月とぬけりて
おとひむもちる時をうらうとて草とちりて掃と

又三意之書ト先後所ニ難向アリ△前漢楊雄傳ニ高明之亦鬼職
其室ヲ△在子ニ念者實之實ニ△百宋在石依免△則在
ナリ文鑑ニ名録アリテ柳子門ノ親友ナリ

○源云は辨と桐の多能より例に依ての温席と云ふは
の以用と云ふもむも色はくは辨の實よりしてこれを
汎諫の證よりたり一もさうと増山氏より一其の福井
考より姑と東山のゆかた更令らるる一今令石原
は後子ひきくは信と通して二子の因と云ふは
子一

佐志松辨

紀梅因

あやむしむしむのそ一松ありちねはあへにらして

いこいゆねとあへにらしてはよるるちとあやむしむしむ
波のうらと私あはれ我作もねはけいこははとね
い我のこふ世とあへに車泊執りてははの所の優遊
いあへにらるる名利を機根にふらふとあへにらるる
ねをねとあへにらるる人とならぬよあへにらるる
すのあへにらるる道すのよあへにらるるにあへにらるる
得るよあへにらるるち方朔のつる禁庭の遠名とあへに
いれしあへにらるる松とあへにらるる月をねあへにらるる
とあへにらるる心とあへにらるる神とあへにらるる耶那の草花

を進し念衣は神の地あききや梅檀とせり仰
 在せしころかり桐とてこの世に種をくらしある人
 手より踏てつゝおもやとてさききるるとさ
 高とてよき百人を好く愛むのまをとやるわちこの世
 集事とておもやれしものゆゑとてさききるるとさ
 いかしちのあしはれとて天運の山あるまじし山
 ありんごりらとておもやとて院字のあききるるとさ
 の電おとよあしとてさききるるとさ
 むしとておもやとておもやとてさききるるとさ
 しくあの花ありしとてさききるるとさ

錦へりて本殿とありて朝の霞よし伸あしとて
 狼籍のほはししおしとて地のあきとてさききるるとさ
 とておもやとておもやとてさききるるとさ
 せあのや能事考のちとてさききるるとさ
 孫とありてあきとておもやとてさききるるとさ
 ともさしとておもやとておもやとてさききるるとさ
 心まいたれ孫とておもやとておもやとてさききるるとさ
 ともさしとておもやとておもやとてさききるるとさ
 とちとれい意皆お仰の孫孫とておもやとてさききるるとさ
 の化轉もさげとておもやとておもやとてさききるるとさ

歡喜路至の流とらやかきしやのりやん

そのりやん

○註曰▲設行者ハ元亨教書ニ傳アリ木履ノ言又ハ別書ニ尋又
 へシ▲本朝軍史ニ平忠盛カ火燃ラ抱留スル言モ▲牛若丸
 ノ千人中モ世ノ知レ所ニテ細拳ニ及ハス▲梅檀香樹ハ仁經
 説ナリ木履ニ寄セタル富言ナリ▲重ヨリ落スル久末仙人
 ナリ諸書ニ在リ細拳ニ及ハス ▲玉鉞トハ道ノ枕詞ニ據ルニ
 自人ノ書ハ寶ノ玉鉞ト枕ラ重キヲ金ト云イ馬鹿野下云ハ
 ル文ノ新續ハ更ニテ此等ヲ錯綜ノ絶妙ト稱スシ ▲晋史ニ
 謝美運好及登山嘗着木履上山去前齒下山去
 後齒▲晋史或人直詣阮孚見其蟹履歎曰未知
 一生當着幾量履 ▲五卷以下ヨリ軒書ニテハ源氏ニ

々負美ノ歌入ナリ其書ニ見レ榊スニ錦ハ路ハ着ノ為ニ目ヲ
 覆ヒテ常ニ水ヲ灌ク故ニ多ク木履ヲ帯ナリ此等ヲ諧語滑稽
 ト知レシ ○古今伊勢ノ書有ル竹内奇ニある川ぬわも
 あらぬ物あらもせふらりり物とある也 ○此れ奇
 古きとをけるくそんおすのむのさうらうからん
 ▲中陰經草木国土悉皆成仏▲法を經ノ庵女成仏ノ段ニ
 變成男子ノ言アリ細拳ニ及ハス

○傳云け又と全く詠賦と化レテ物より物なりなり
 と云々古語と物と一洋ノ塵語ありんやあると
 伊勢ノ書云ふより今ノ書其の次々と云々梅ノ衣衣
 の花とららとこれに詠笑の詠諷と云々や作者伊勢
 由りし尾の陣下ノ嘉道と云々市中の雨と柳ノ花

梓のちりもきもあらねんはれしをぬのねのちり
山川下りよ梓とをれをさきよの神の後裔
はるもあらしもあらしをさき

○註曰見繫辭黃帝下斷木為梓掘地為向云梓
世發端見解人富言言黃帝始云云云
佛說行勢古記云前出云
●東坡句詩豎金破
混泥也云○後成之云云
○論語曰世如馬
●班女力羽歌前出云
●深中明石云珠女のり
もきもあらしとあり
△山川下りよ梓とをれ
はるもあらしもあらしをさき

○はるもあらしとをれと云く詠諧して昔帝のちり
さかしのとりにあらしをさきと云ふ
もさきと云ふと云くはるもあらしと云ふ
さかしのとりにあらしと云ふはるもあらしと云ふ
て解はるもあらしと云ふはるもあらしと云ふ
作者は伊弉の書後各一作も依と部中の古をよて
風雅はるもあらしと云くはるもあらしと云く

眠五説

東菴坊

けあしと代の風雅ありしを祖と眠不云といひて又と
眠語とつ小眠語を我あしと云くはるもあらしと云く

られたるうゝ子眠車と茶を坊にあひて今のみまを
 ねらる色をいして寝心の風雅を睡りてその互のあり
 まるねむり地をねむり人うねむり月をよねむるを
 して能くねむるもせせれ天地人う眠る付を
 天地人のありれもさうもてその能くをいひて
 のつひも次へ月をよ眠る付を月をいひてその目
 まるねむり心の風雅と云ふんはは時の香も
 一のつひもさうして能く眠る付を世間の事をも
 りてその心は心の極の香に耳をたててその月をさ
 せん時やあらひあひ新りの念付るははせんその

いひもけふのものを睡りてあら茶をその
 まる一はれいそねね茶をそのひのすく下りてその名
 いつらうとてい一難とがそのもの也

○評云けい語を虚説あり一睡りて其の茶を飲る例のい
 く例のわくことと名説の當用といふ一されははとを
 越のまに津く石隙夜う送末として一向の新茶をちり
 月をよる茶好の各言とかりと唯よる茶の諸語といひて
 あら茶と石の蔵言とて一茶の記述といひて
 として註解の筆を多しといひて文を向ての用とてい

捨録記

陳素六

むうかぬらね頼朝を茶挽米おののちん

多子の久富も自在夏加あしせのくちあり

○海云は説と例ありし七名の中にかの解と釈して
 いまくの通語と獅の風情となするにこれらに
 他浩の名説して目らうとらひはらうとらふ二名
 の結文と稱して一とよむは子のをとらふ解と
 の富言とらふとらひ作をら行おの春名とらふと
 或る京師とらふと或る尾城とらふと陳とらふと
 依と部と氏とらふとまはる尾城下の能名ちりしと
 一解と名の風とらふと

文部書之五終

